

やまぶき

埼玉北西部の和算研究の個人通信
(題字 伊藤武夫氏)

第18号 平成二十七年(二〇一五)一月一六日

発行部数 十五部 (不定期刊行)

発行者 東京都羽村市

山口 正義

小川町の和算家(三)

一、はじめに

新年の最初の号も過去の調査を思い出して述べます。小川町勝呂の吉田勝品です。実家を訪ねたのは二〇一三年四月でした。ご対応頂いた吉田稔様に感謝申し上げます。また、福田重蔵の実家も訪ねました。書きたいことは沢山ありますが…。

二、吉田勝品の概要

吉田源兵衛勝品は文化六年生まれ。男衾おぶすま郡竹沢村勝呂(すゞ)の名主。明治二十三年死去。八十二歳。戒名は眞譽豁然勝品清信士。幼少の頃漢学を学び、文政五年父について算学を学びはじめました。同十年には上州の市川行英の門人福田重蔵に入門し関流九伝を受け(吉田勝品一代誌)に九伝とあることに依りますが、市川行英は八伝、福田重蔵は九伝だから勝品は十伝の筈だが…、のち、

杉田久右衛門に至誠賛化流を学び、天保三年頃から仕事の合間に算学の教授を始めたが、維新後は隠居して本格的に教授に打ち込んだと言います。門弟の数も多く五百人程(算法九章名義記秘術帳)いたといわれます。明治十一年門弟たちが勝品の七十歳を祝して寿蔵碑を建てています。義大夫や和歌を好み旅行好きで、生花や三味線も好みます。

勝品は明治維新後、「吉田勝品一代誌」と題した自伝をまとめている。この一代誌について三上義夫は、「一代誌と云ふ如きものを書き遺した算者は、世にも誠に珍らしい。(中略)数学教育史上の珍史料とも言ふべきであらう。吉田源兵衛の一代誌は文飾など更に試むる事をせず、卒直質実にて、資財の事などをも取交ぜて、無造作に記録してあるのが却って嬉しいのである」(武州比企郡竹澤小川の諸算者)と述べている。一代誌には多くの和歌が載せてある。勝呂の吉田家には、この「吉田勝品一代誌」の他に「吉田氏系圖」や「算法九章名義記秘術帳」などの算術草稿があり、これにより勝

品の経歴が判明します。

幸い、この一代誌全部と肖像画等の原本の複写を小川町教育委員会に申請して入手することができました。

三、肖像画

埼玉北西部の和算家で画像が残っているのは、行田市の田中算翁(肖像画)と吉田庸徳(写真、それにこの吉田勝品(肖像画)の三名です。この吉田勝品の肖像画はいつ頃のものか不明ですが、脇差しを差して教授している様子とも思えるので幕末頃のように思えます。



吉田勝品肖像画⁽¹⁾

四、吉田勝品一代誌

吉田勝品一代誌は八十七丁に及ぶ長文のもので、算術の習いに関する部分を「小川町の歴史」が解説的に述べているので抜粋して次に示します。

勝品の算術稽古は、父の勝吉の手ほどきで

始まり、文政六年正月までには算盤で行う割り算である八算・見一を始め相場割も習得したという。基本的な算術を習得した勝品は、父にとまなわれて毎年年貢勘定に向向いています。勝品は、開平や開立など、より高い算術知識を学ぼうと笠原村の福田重蔵への入門を熱望した。福田は門弟を多く抱えていたが、門人神文料金一〇〇疋をはじめ開平法伝授料金一〇〇疋、開立法伝授料金二〇〇疋、合計金四〇〇疋(金一両)、伝授には四日を要するため一日あたり金一〇〇疋という多額な入学金や授業料の負担があつて、勝品の入門を阻んだ。

算術への熱意を諦めきれない息子のために父は、自らの門弟や友人たちに勝品の意欲と現状を相談した。そして入門により伝授された算術をさらに勝品から伝授を受けることを条件に、三人の仲間が金一〇〇疋ずつの援助を申し出た。この結果、勝品一九歳の文政十年正月七日、福田重蔵への入門がようやく叶い、当日開平術をまず伝授された。福田の指南は同月十二日・十五日と続き、算木や算盤を使った開立・三乗・四乗から九乗までの算術や天元術を伝授され、ほぼ三日で関孝和による九伝免許書を授与された(筆者:確かに原文には「関孝和大先生九傳免許書頂戴ス」とありますが、福田重蔵が勝手に与えた?)。そして約束通り先の三人へ習いたての算術を勝品は伝

授した。

さらに算法の奥儀を極めようという勝品の思いは日増しにつのるばかりであった。そのころ小川村下宿に質屋や酒造を営む杉田久右衛門という裕福な商人がいた。久右衛門は、若いころから算術を好み、後に至誠賛化流を興した旗本の古川山城守氏清に師事し、算術の達人として近隣にその名を馳せていたが、小川では算術指南をしていなかった。しかし、勝品は、文政十年正月二十五日、小川村名主の笠間庄左衛門の口利きで門弟となる。勝品が久右衛門宅へ行けるのは、日々の商いで忙しい師匠の指示もあり、休日や雨の日に限られていたが、そこで算術関係書籍を読みふけり、直々に口伝を受けたりした。算術書は写して持ち帰り帰宅後にその復習に終夜没頭し、次の日には田畑での農作業に勤しむ日々であったがどれもおろそかにはせず、天元術・演段諸役術を熱心に勉強したという。

ところがそうした無理が高じ、入門以来およそ八か月後の同年八月に頭部の激痛に苛まれた。医師の診たては、この病は算術に心惑わされ、気根を失つたのが原因で、「算術を捨て薬用保養しなければ命も危険だ」と忠告される。これにより一命には換え難いと、算木と算盤を氏神へ奉納し、算術を捨てることを誓ったという。保養の日々を送る勝品の無聊を慰めたのは、当時流行していた義太夫であ

った。その一方で農業にも精励し、家業は決して怠らなかつたという。その甲斐もあつて、徐々に田畑を増やし家産を積んだ勝品は、天保三年(一八三二)に勝呂村の組頭に任命された。

こういった具体的なことが沢山書かれているのが一代誌です。後は省略します。



吉田勝品一代誌の一部⁽²⁾

五、寿蔵碑

明治十一年門弟達が勝品の七十歳を祝して建てた寿蔵碑(生前碑)が実家にあります。碑の表面には家系の略記、夫婦の戒名、辞世、それに「算法関孝和先生九傳門数多内」として、「高弟連名次第不同」と横書して、三

段に門人三十名の姓名などが書かれています
(先頭に10号で紹介した平山山三郎あり)。
生前辞世は次のようなものです。

限りなき管の浮世の壽に

弥陀の浄土の法やゆかしき

裏面には「想遺碑曰」と横書した下に碑文
(省略)があります(この碑文は数年後り明



寿蔵碑 (2013年4月写)

治十七年に成ります)。

六、算法九章名義記秘術帳

「算法九章名義記秘術帳」は明治十六年勝
品が七十五歳の時に著したものです。筆者は
実見していませんが、(武州比企郡竹澤小川の諸算
者)には算術書に卷子本一卷と稿本の二種類
があり、巻物の方が四二五問、稿本の方は五
三五問がある(巻物の方が「算法九章名義記
秘術帳」ということや、福田重蔵から免許を
受けたことなどが述べられているということ
です。

七、福田重蔵

福田重蔵(一七六八〜一八四七)は小川町笠
原(栃本)の人です。八十歳で亡くなります。
号は竹算。市川行英に閩流を学び閩流九伝と
称したと言いますが本当に行英から免許を受
けたか甚だ疑問です。重蔵は行英より三七歳
も年上でした。行英に入門に際して提出した
神文には文政九年とあり五十八歳の時です。
竹算という号は師の市川行英に提出した神文
の中に見られます。また福田家の墓地の墓誌
には、「法算重輪居士 重蔵 茂三郎父 弘
化四年七月四日没 八十才」とあります。
文政九年に師の市川行英に提出した「神文
一札之事」(大正時代の写、学士院)は次の
ようなもので、この一年後に吉田勝品に教え
ています。

神文一札之事

一 御當流新撰之術一源之明算他言
仕間鋪候

一 御傳授之算書之内他向申間鋪事

一 御指南算書開板仕間鋪候事

右之條々於違反者大日本国中

大小神祇可蒙泰山府君御罰者也

依而神文血判如件

文政九丙戌年

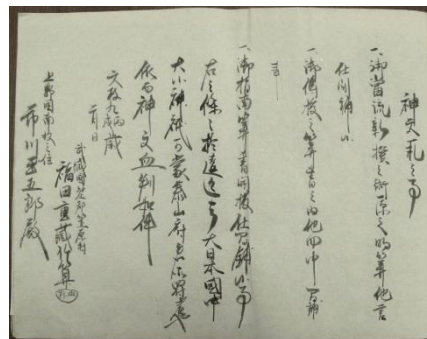
二月日

武蔵國比企郡笠原村

上野国南牧之住

市川玉五郎殿

福田重蔵竹算血判



福田重蔵の神文(日本学士院、大正時代写)

重蔵の墓は明治四十三年の山崩れで埋没し、後に再建したものがあると言われているが、現在の福田家の墓には重蔵に関しては、福田家先祖代々精霊之墓に、法算重輪居士 重二 弘化四年七月四日没とあり、その脇にある墓誌には、法算重輪居士 重蔵 茂三郎父 弘化四年七月四日没 八十才とあります。更に先祖代々受賞之記録には、法算重輪居士 和算学者閩流八伝市川玉五郎行英門人閩流九伝免許皆伝とあります。

福田重蔵の享年は墓誌によれば八十才とあり、逆算すれば明和五年生まれとなります。文政十年、吉田勝品が師事した頃に「六旬余の老翁」であったとあるから合致します。

実家の人の話では、今は資料は何も残っていないということでした。

参考文献

- (一) 小川町教育委員会 (勝呂吉田武文家文書 56)
- (二) 小川町教育委員会 (勝呂吉田武文家文書 48)

鳩山町の円正寺不動堂の算額

比企郡鳩山町赤沼の円正寺は南北朝時代の雲版うんぼんを有することでも有名な曹洞宗の寺院で、多くの貴重な絵馬もあります。円正寺不動堂に掲げられていたこの算額は、文政十一年(一八二八)に開流の和算家である円正寺十三代住職の正宗道全が奉納したものと云われますが⁽¹⁾、その開流の師は不明です。算額には図形以外の菅原道真の天神像が描かれています。これは太宰府の飛び梅伝説(太宰府へ左遷された道真を慕って宮中の梅が一夜のうちに太宰府まで飛んでいったという)との関連で、梅鉢をモチーフにした問題が出

題されています。不動堂は現在不動閣として再建され算額も保存されています。

問題は五つの等円を梅の花を模して環状に接するように配置したとき、その内側に五つの円に接する円の大きさを求めるもので、正五角形に関する三角関数の初歩的問題です。術文の部分が風化して読めなくなっているのは残念なことです。(第19・22号参照)



境内二町八反分外三万一千三百坪内外二和而有積三万九千七百坪今如图梅花而得等圓径内圓径問其術如何

答曰

内圓径六十七間今九寸一分有奇

……平方 開平方 矚内減一箇余

…… 只云積開平方

……

文政十一年

仲冬吉日

…… 正宗謹著之

参考文献

- (1) 「文化財だより 第18号」鳩山町教育委員会発行 (平成10年3月30日)

(二〇一〇年四月訪問)

編集後記

平成二十七年の最初の号は、さいたま市西区中釘の秋葉神社の算額を見学してから書くかと思いましたが、見学がしばらくの間叶わないというので、昔見学した円正寺の算額を記事にしました。

このところ寒さが厳しい。いつもの散歩コースの公園から見る御嶽の大岳も雪を被りました。古今和歌集をみていたら次のような和歌がありました。

雪ふれば冬こもりせる草も木も

春に知られぬ花ぞ咲きける(紀貫之)



円正寺の算額 (2010年4月写)